photopos 85

2020.6.8〜 2020.7.2

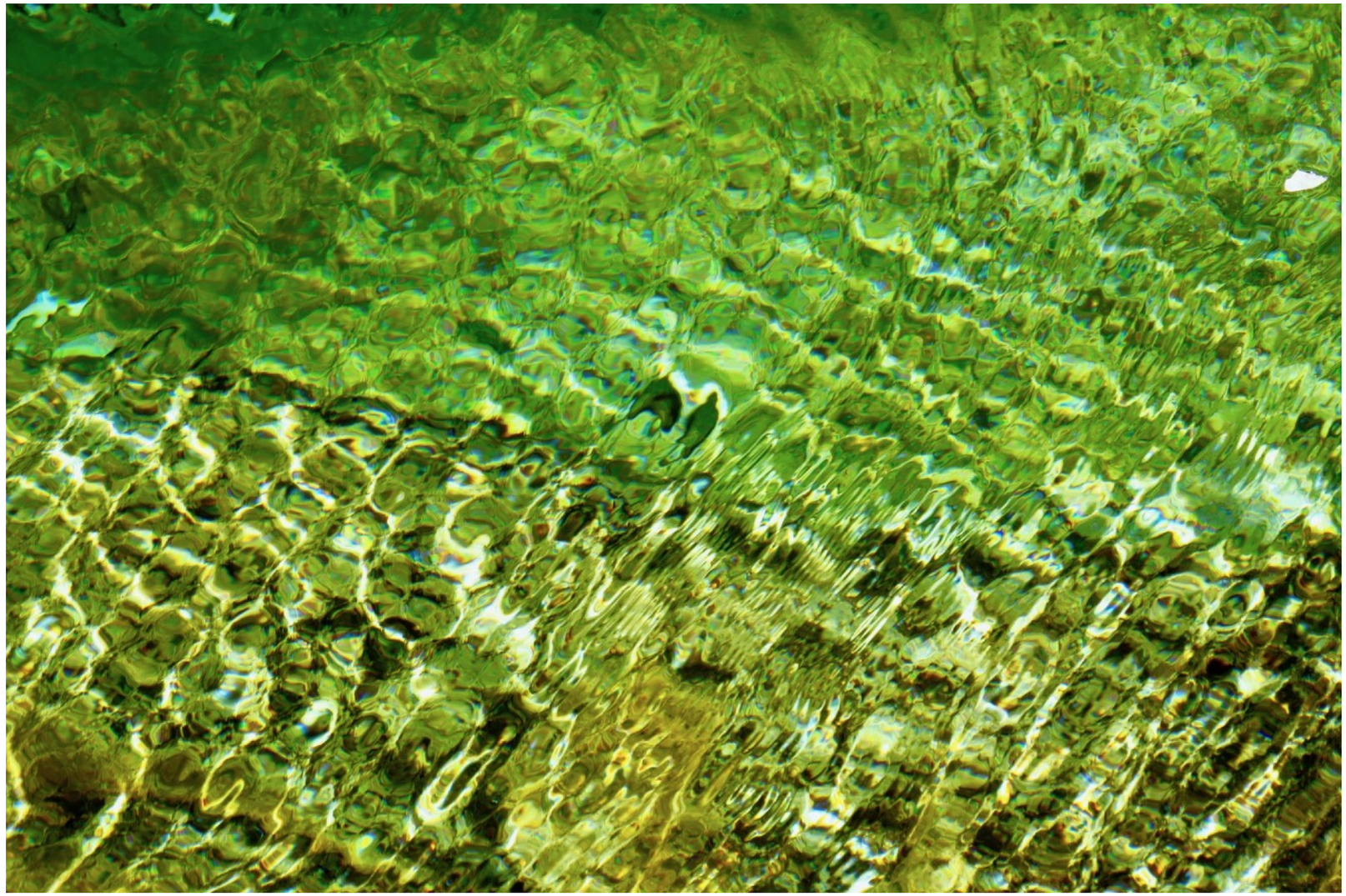
【神秘学ポエジー〜風遊戯 第 170集】

photo ヴァージョン

Photopos2101-2125

神秘学遊戯団

☆photopos-2101　　2020.6.8



※愛媛県久万高原町・面河渓にて

水の
流れるままに
いつのまにか
時はすぎ

いつも
今だった時は
重なり
重なりながら
遠ざかり
また近くなり

光の
流れるままに
いつのまにか
時はすぎ

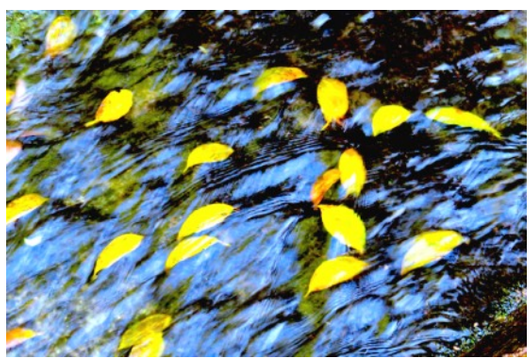
記憶の今と
今を生きる今と
交差し
捻れては
戻り
また訪れ

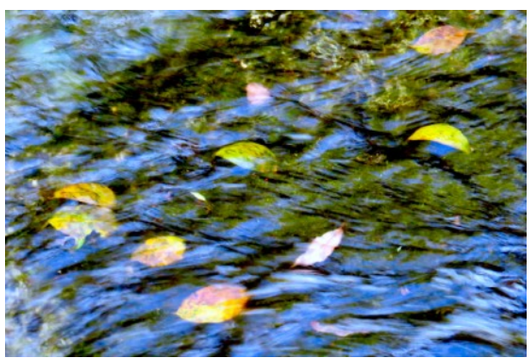
心の
流れるままに
いつのまにか
時はすぎ

私とは
いったい
だれなのか
今とは
いったい
いつなのか

鏡のなかに
はるか鏡が
続いてゆくように
映し映され
時の迷路で

☆photopos-2102　　2020.6.9





※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

みんなと
おなじなら
こわくない
のが
いちばんこわい

ひとりが
そこには
いないから

ひとりで
いられると
みんなと
ちがっていられるのに

みんなと
つながっていれば
あんしんできる
のが
いちばんふあんだ

じぶんが
そこには
いないから

じぶんが
そこにいると
みんなとともに
みちをつくれるのに

☆photopos-2103　　2020.6.10

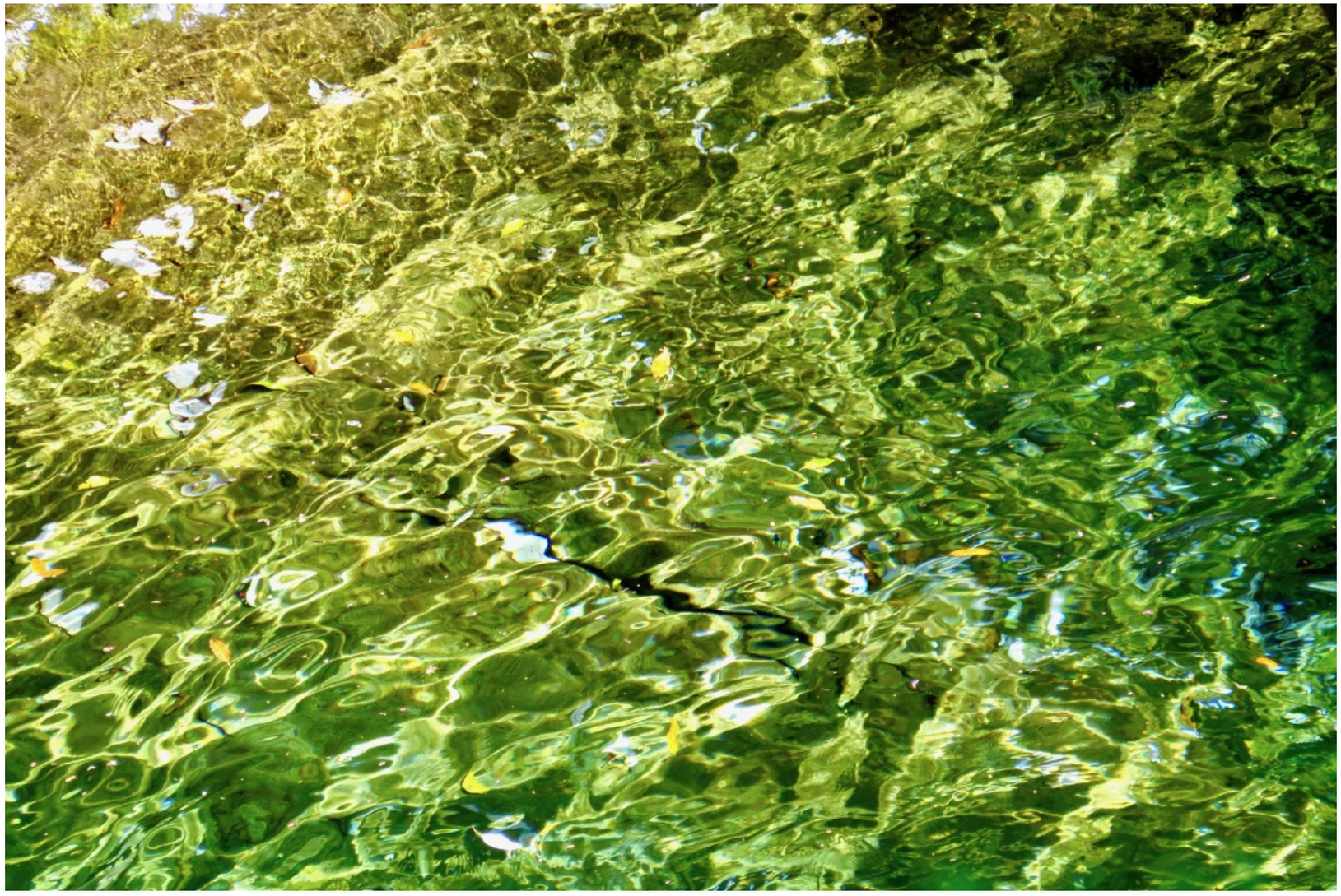
※愛媛県松山市・重信川河口にて

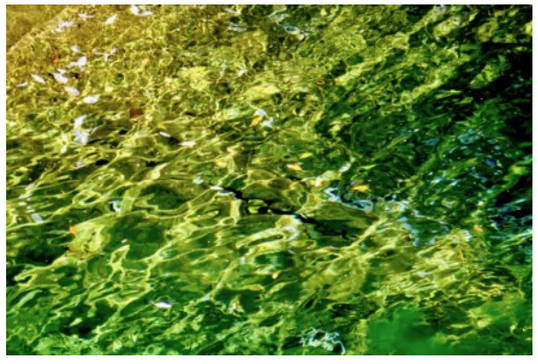
見えないところで
つながっているのに
わたしにはわからないから
わたしはわたしの道を歩む
歩むことができる

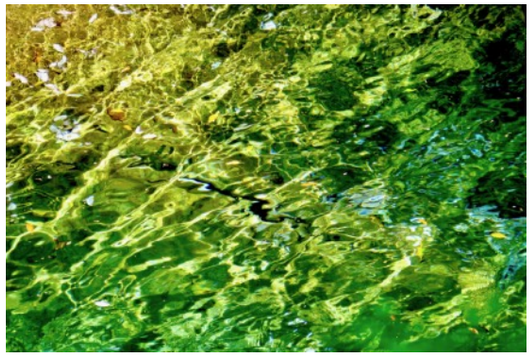
すぐそばにいても
わたしにはわからないから
わたしはあなたを探している
永遠のあなたを

それがいつなのか
決まっていても
わたしにはわからないから
わたしは待ちつづけている
待つという時の魔法のなかで

☆photopos-2104　　2020.6.11







※愛媛県久万高原町・面河渓にて

からだの
ずっと
ずっと奥に
深い
泉がある

その泉で
静かに
湧きつづける
光に
じっと
耳を
すませる

すると
光は
思いとなって
たえず
流れでているのだ

そして
こころは
それを
ことばに
しようとする

けれど
ことばは
祈りにも
歌にもなれないまま

ただただ
泡沫のように
浮かびくるばかり

☆photopos-2105　　2020.6.12

※愛媛県内子町・小田深山渓谷にて

生きることは
ともにあること

それは
与え
そして
与えられること

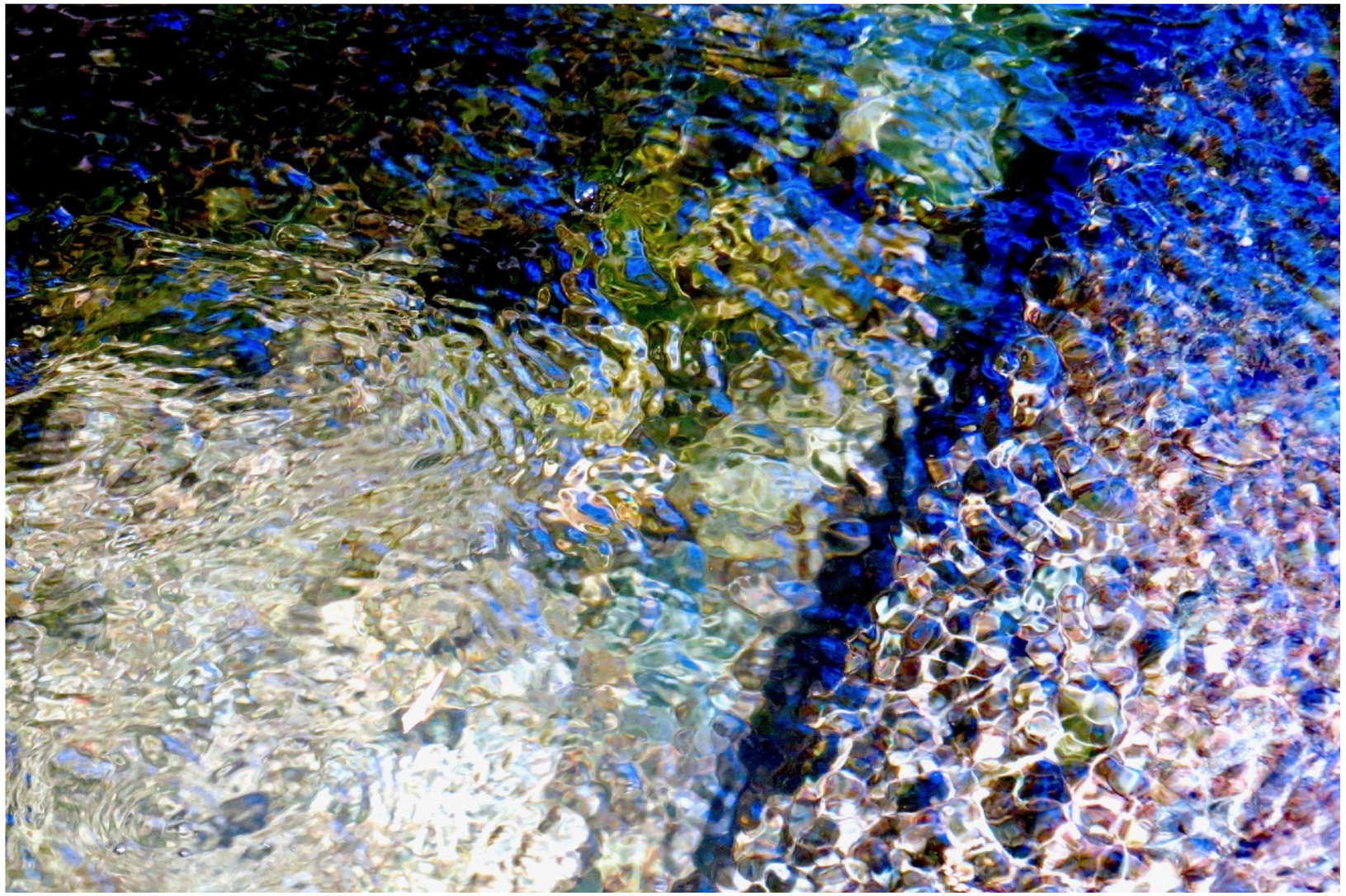
与えるならば
与えられるだろう

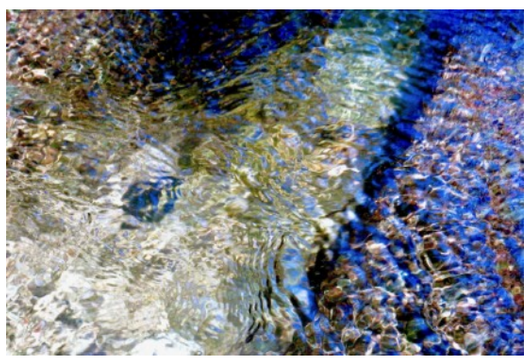
光であれば光が
闇であれば闇が
愛であれば愛が
憎しみであれば憎しみが

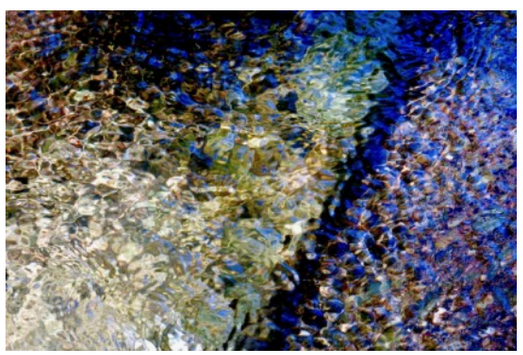
時は
めぐりつづけ
与え
そして
与えられながら
姿は変わってゆくだろう

ともにある
という
はてしない
遊戯と矛盾に満ちた
神秘的な交感のなかで

☆photopos-2106　　2020.6.13







※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

それは
いったい
何なのか

（問われることで）
（分からなくなる）

分けても
それは
分からない

（分からないとき）
（渾沌となっているのか）
（渾沌は死んでしまっているのか）

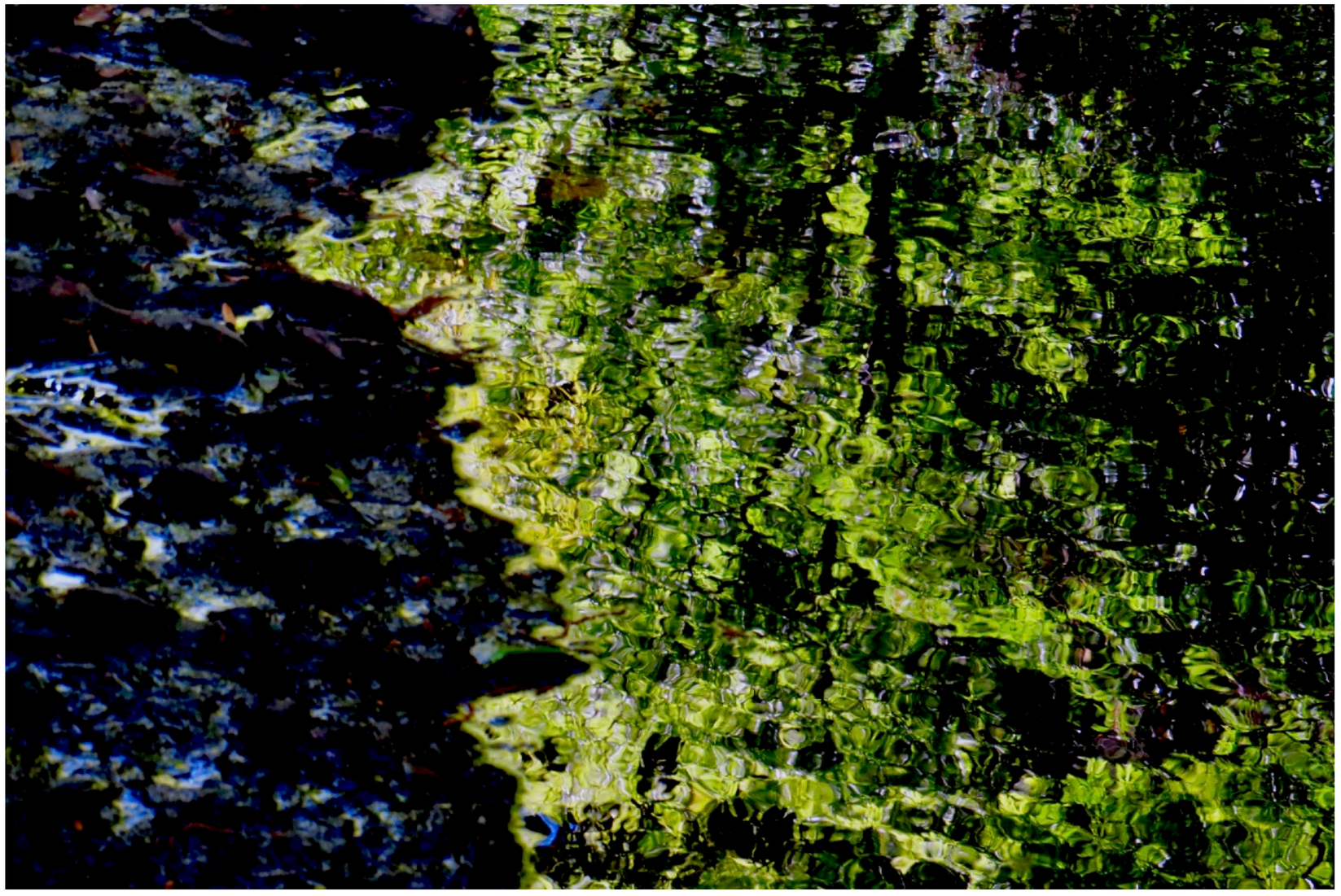
名づけると
そこから
名でないものが
失われてしまう

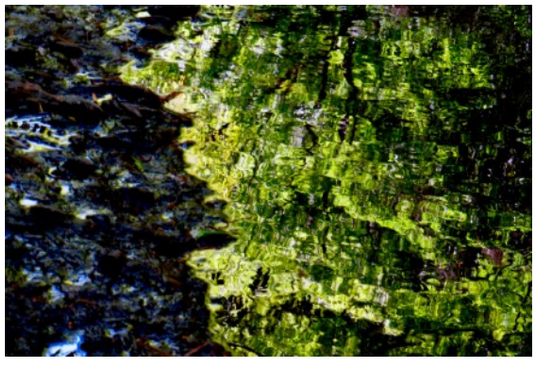
（光あれ！）
（すると光は生まれた）
（光でないものは失われたのか）

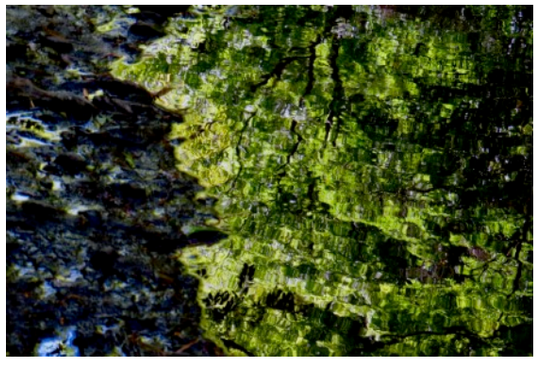
考えているとき
考えている私はある
考えていないとき
私はどこに

（私のからだに）
（私の外に）
（それとも）
（私はいないのか）

☆photopos-2107　　2020.6.14







※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

闇の深みで
夜が明けるのを
じっと待つように

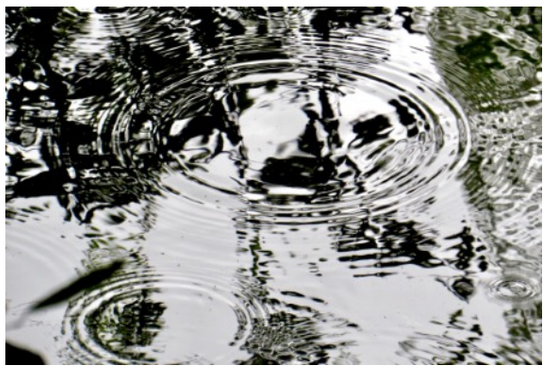
愛し愛し続け
はるかな時を経て
愛が与えられることを

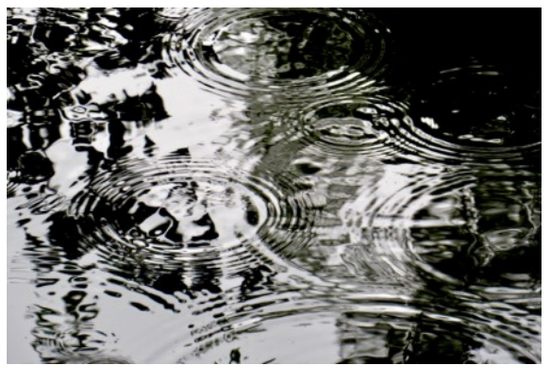
救いが訪れるように
待ちつづける
時のディスタンス

時と反比例し
遠ければ遠いほどに
祈りは強まり

やがて
愛は姿を変えて
奇跡の魔法となる

☆photopos-2108　　2020.6.15





※愛媛県総合運動公園にて

わからないからこそ
おもしろい

存在はすべて
秘密そのものだ
秘密であるからこそ
おもしろい

地図がないから
歩きたい

道はほんとうは
どこにもない
どこにもないから
道となって歩くのだ

教われないことだから
学びたい

どんな智慧も
教われない
教われないから
智慧となるために学ぶのだ

☆photopos-2109　　2020.6.16

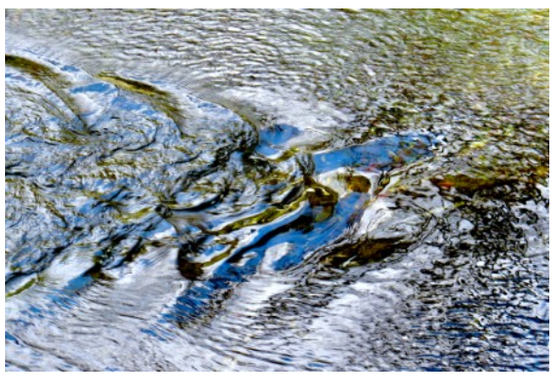
※愛媛県松山市・重信川河口にて

ひとつの色のなかに
すべての色がある
すべての色のなかには
そのただひとつの色がある

ひとつの音のなかに
すべての音がある
すべての音のなかには
そのただひとつの音がある

ひとりのなかに
すべての人がいる
すべての人のなかには
そのただひとりがいる

☆photopos-2110　　2020.6.17



※愛媛県内子町・小田深山渓谷にて

夢みる者の如く
未来を目指す者
年老いた者の如く
過去へと帰ろうとする者

科学は技術を誇り
未来へ進もうとし
宗教は祈りとともに
過去へ帰ろうとする

その「さき」は
未来でもあり
過去でもある

「さき」とは
いつ
そして
どこなのだろう

ひとは
矛盾のなかを
その「さき」へと
歩まねばならないのだろうか

☆photopos-2111　　2020.6.18

※愛媛県松山市・重信川河口にて

わたしの
うたう
そのうたは

しずかな
なみの
こもりうた

ひとつ
ふたつと
ゆりかご
ゆれて

ひかりも
みずも
ねむります

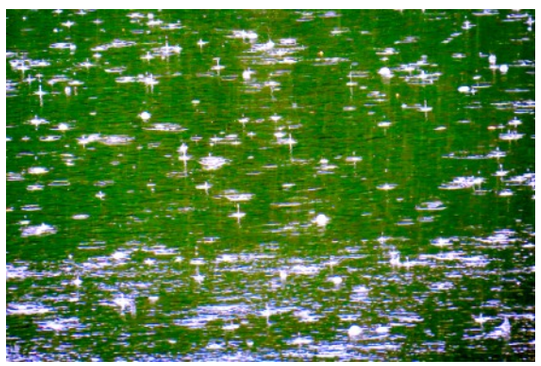
わたしの
うたう
ゆめのくに

ひとつ
ふたつと
とびらが
あいて

こころも
からだも
とびらが
あいて

ひみつの
へやで
めざめます

☆photopos-2112　　2020.6.19



※愛媛県総合運動公園にて

咲かなければ
散らなくていいのか

天から落ちた雫のように
心の鏡に雨が降り
あちらこちらと花模様

魂はどこから訪れ
何を求め
どこへと去ってゆくのか

はるかな記憶と
はるかな愛と

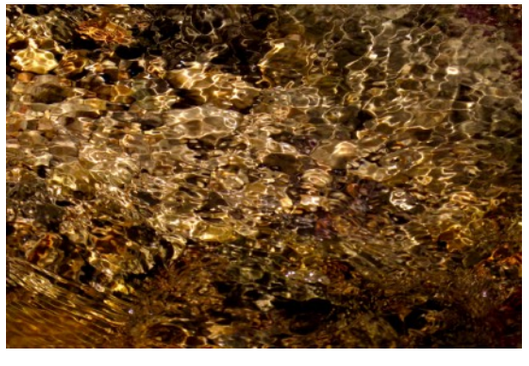
思い出せるならば
すべては
光のもとにあるのか

それとも
光ゆえに
闇は生まれるのか

目覚めると
今日も
わたしはわたし

秘された心と
秘された花のままで

☆photopos-2113　　2020.6.20



※愛媛県伊予市・森林公園にて

流れも
澱みも
水は水

晴れも
曇りも
空は空

甘いも
辛いも
味は味

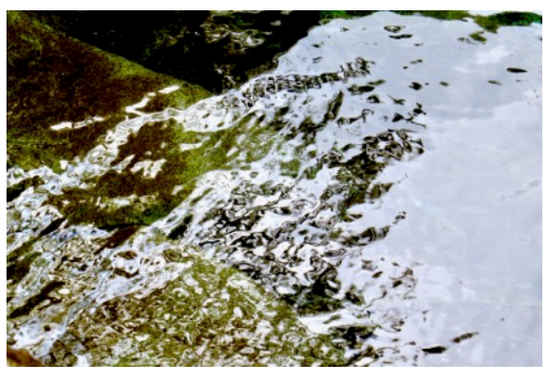
問いも
答えも
謎は謎

現実も
虚構も
鏡は鏡

理性も
感性も
心は心

秘密も
開示も
門は門

☆photopos-2114　　2020.6.21



※愛媛県久万高原町・面河渓にて

それはなにか

それを問うとき
日常は壁を築かねばならない
正気を保つためだ

壁が崩れるとき
日常は脆くも崩れ
それはそれではなくなってしまう

けれども
壁の内は
壁の外によって
保障されていることを知らねばならない
非日常ゆえにこそ
日常があるのだから

そしてやがて
問わなければならなくなるときがくる
それはなにかと
壁の外で

それはなぜだ

それを問うとき
意味は囲われなければならない
世界を終わらせないためだ

囲いが解かれるとき
意味は意味の外へと流れ出し
それは意味ではなくなってしまう

けれども
意味あるものは
意味なきものによって
保障されていることを知らねばならない
世界の外があるからこそ
世界は存在できるのだから

そしてやがて
問わなければならなくなるときがくる
それはなぜだと
世界の外で

☆photopos-2115　　2020.6.22

※愛媛県内子町・小田深山渓谷にて

叫びのなかに
うたがあり
沈黙のなかに
うたがある

乱流には
乱流の道
叫びのなかでこそ
顕れる姿を舞え

清流には
清流の道
沈黙のなかでこそ
生まれるうたを聴け

生が死への螺旋をめぐるように
はじまりはおわりへ
死があらたな宇宙卵を孵すように
おわりははじまりへ

変わりゆくもののなかに
祝祭は変わらぬものを舞い
変わらぬもののなかに
永遠は深まりゆくものをうたう

☆photopos-2116　　2020.6.23

※愛媛県久万高原町・面河渓にて

あなたがいる

それだけで
わたしは
わたしでいることができる

あなたの名をよぶ

それだけで
わたしは
わたしでいることができる

どんなときも
どこにいても

あなたがあなたで
そうして
わたしがわたしで

ひとりでいることが
ふたりでいることで
ふたりでいることが
ひとりでいることで

あなたがいるから
わたしがいる
わたしがいるから
あなたがいる

☆photopos-2117　　2020.6.24

※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

ぼくの聴いている声は
いったいだれの声なのだろう

生まれてからずっと
ぼくはその声を聴いて
育ってきたようだ

それは声というには
音でさえなく
もちろん言葉でもない
言葉になるまえの声のような

考えるときも
その声は響いている
考えることがうまくいかないときは
声がうまく響いてこないときだ

その声は
ひとりのときに聞こえてくる
ひとのなかにいると
声は遠くなってしまうようだ

音になって聞こえてくるひとの声が
ぼくのまわりに壁をつくってゆき
ぼくの声もぼくの声ではなくなってしまう

じぶんの声をさがして
迷子になることもある
喉が渇いて涸れて行方をなくすのだ

ほんとうにひとりになれると
やがて声はかえってきて
あの声もきこえはじめ
胸も少しずつひらかれてゆく

ぼくの聴いている声は
いったいだれの声なのだろう

☆photopos-2118　　2020.6.25

※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

歌うために
歌をなくした
ほんとうには
歌えなかったから

見るために
見えなくした
ほんとうには
見えていなかったから

知るために
忘れてしまった
ほんとうには
何も知らなかったから

求めるために
森の奥で迷った
ほんとうには
求めていなかったから

歩くために
じっと立ちどまった
ほんとうには
歩いていなかったから

目覚めるために
深く眠り込んだ
ほんとうには
目覚めていなかったから

愛するために
激しく憎んだ
ほんとうには
愛がわからなかったから

☆photopos-2119　　2020.6.26

※愛媛県内子町・小田深山渓谷にて

自由には作法がある

おのれの理由を
妨げる力のなかでこそ
流れ続けなければならないのだ
流されながら
流されないものをたしかにもつように

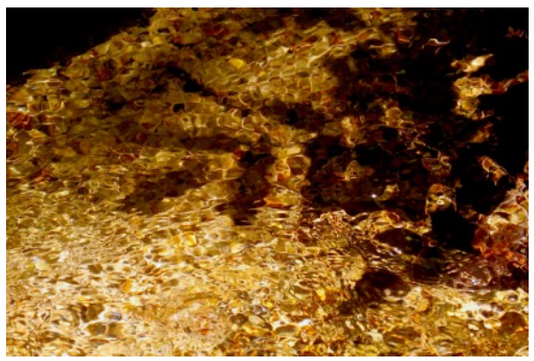
けれども自由は
そのような
妨げる力からの自由だけでは足りない
理由へ向かう力をこそ持たねばならない

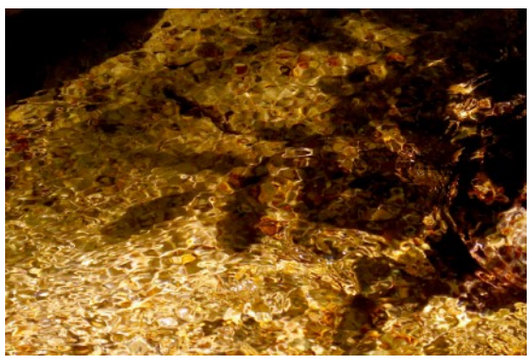
詩人には作法がある

詩人はほんとうは
沈黙のなかで生きている
詩人の沈黙は光だ

けれども
光は光だけでは
あらわれることができない
光を撥ね返す言葉で
語らざるえをえないのだ
沈黙するためにこそ
語りつづけるように

☆photopos-2120　　2020.6.27





※愛媛県伊予市・森林公園にて

光の射すところには
影が生まれます

影は光にあこがれて
いつかはじぶんも
光になりたい
そう思いました

風がふくと
影は不安でゆれ
水にうつる姿は
千々に乱れました

影は光に
問いかけました

わたしはどこからきて
どこへ消えてゆくですか
わたしにはじぶんがわからない

光は影に
言いました

あなたは
そこでゆれている樹の影
わたしが樹に微笑みかけるとき
あなたが姿をあらわすのです

だからあなたは
わたしと樹との大切な子ども
でもわたしでも樹でもない
つかのま姿をあらわすだけの幻

そしてそのうち
光はしだいに弱くなり
影もいつのまにか消えていました

☆photopos-2121　　2020.6.28

※愛媛県内子町・小田深山渓谷にて

みんなといると
わたしが
いなくなるから
わたしは
つながらないで
ひとりでいる

そうして
ひとりのみんなといられる

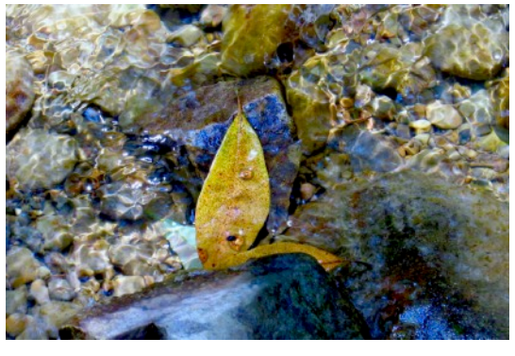
みんなと歩くと
わたしが
歩かなくなるから
わたしは
つながらないで
ひとりで歩く

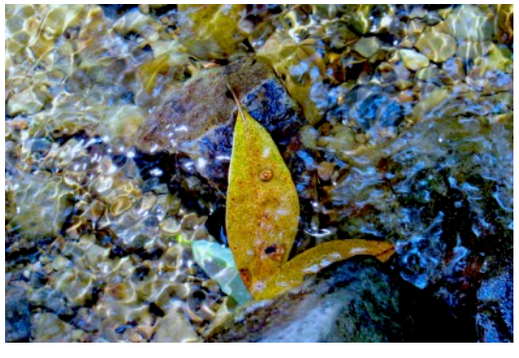
そうして
ひとりのみんなと歩ける

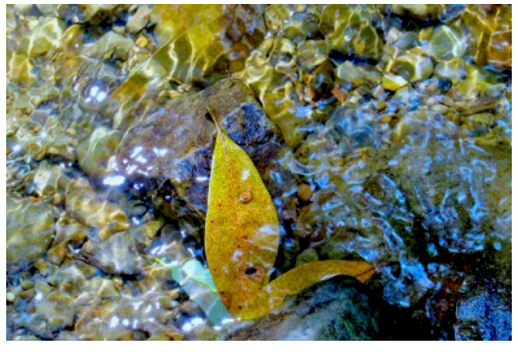
みんなと考えると
わたしが
考えなくなるから
わたしは
つながらないで
ひとりで考える

そうして
ひとりのみんなと考えられる

☆photopos-2122　　2020.6.29







※愛媛県伊予市・森林公園にて

スーフィーの伝えるこんな話がある

飲むと狂ってしまう水を飲んで
狂気の世界を生きている人々と
その水を飲まずに狂気から逃れていた男がいたが
その男は狂気の人々から狂気とみなされた

しかし男はそれに耐えられなくなり
人を狂わせる水を飲む決心をした
そうすることで男はその狂気の人々から
狂気から回復した男と呼ばれた
という話だ

常識が狂気となったとき
選択肢はいくつかある

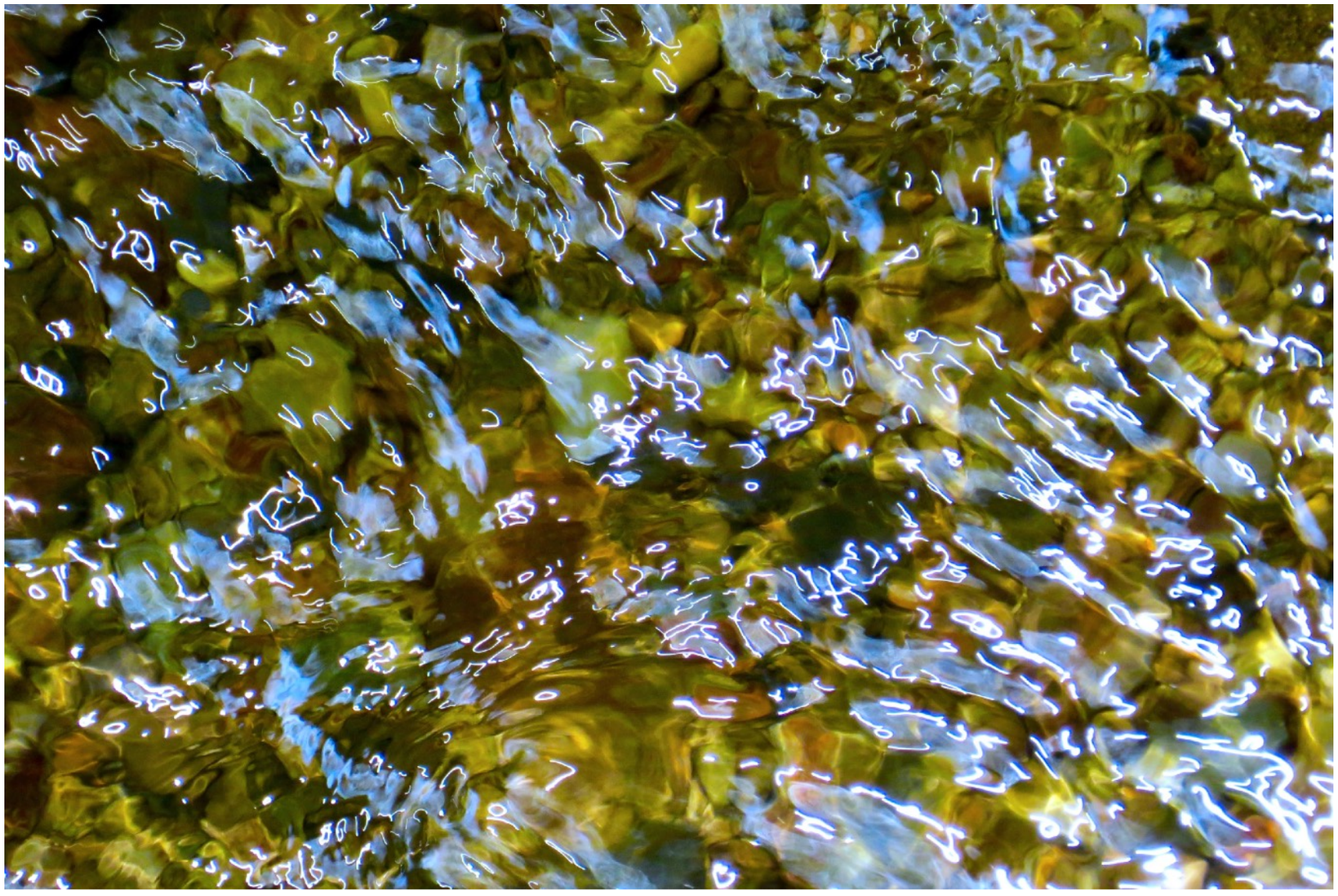
疑いもせずその狂気を信じ従うか
狂気に従うふりをし続けるか
狂気という常識からみてあえて狂気となるか

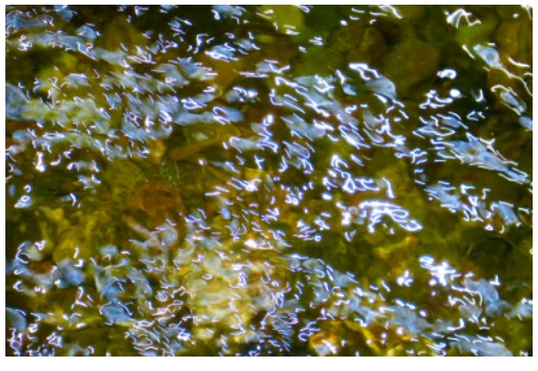
狂気は往々にして空気のようなもの
流れが変われば狂気の質も変わってゆく
多くの狂気はそんな空気感染で次々と起こる

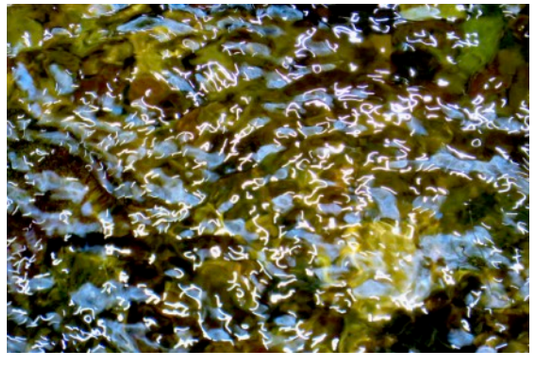
世慣れた賢しき者は利多き狂気を選び
別の狂気の訪れたときには
迷いなく新たな利を選び続けるのだろうが
魂に理があるかどうかは知れない

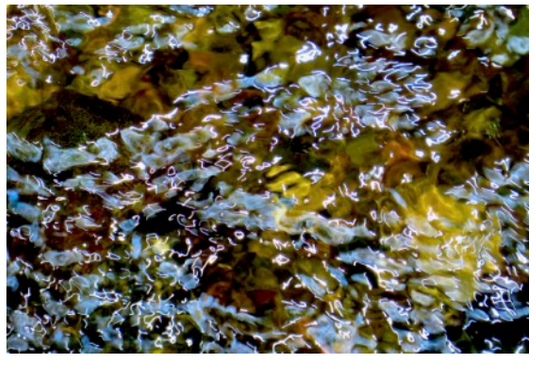
とかくこの世は生きにくい
スーフィーならばどう生きる

☆photopos-2123　　2020.6.30









※愛媛県伊予市・森林公園にて

わからないのはいいものだ
わかるときの
どきどきが待っているから

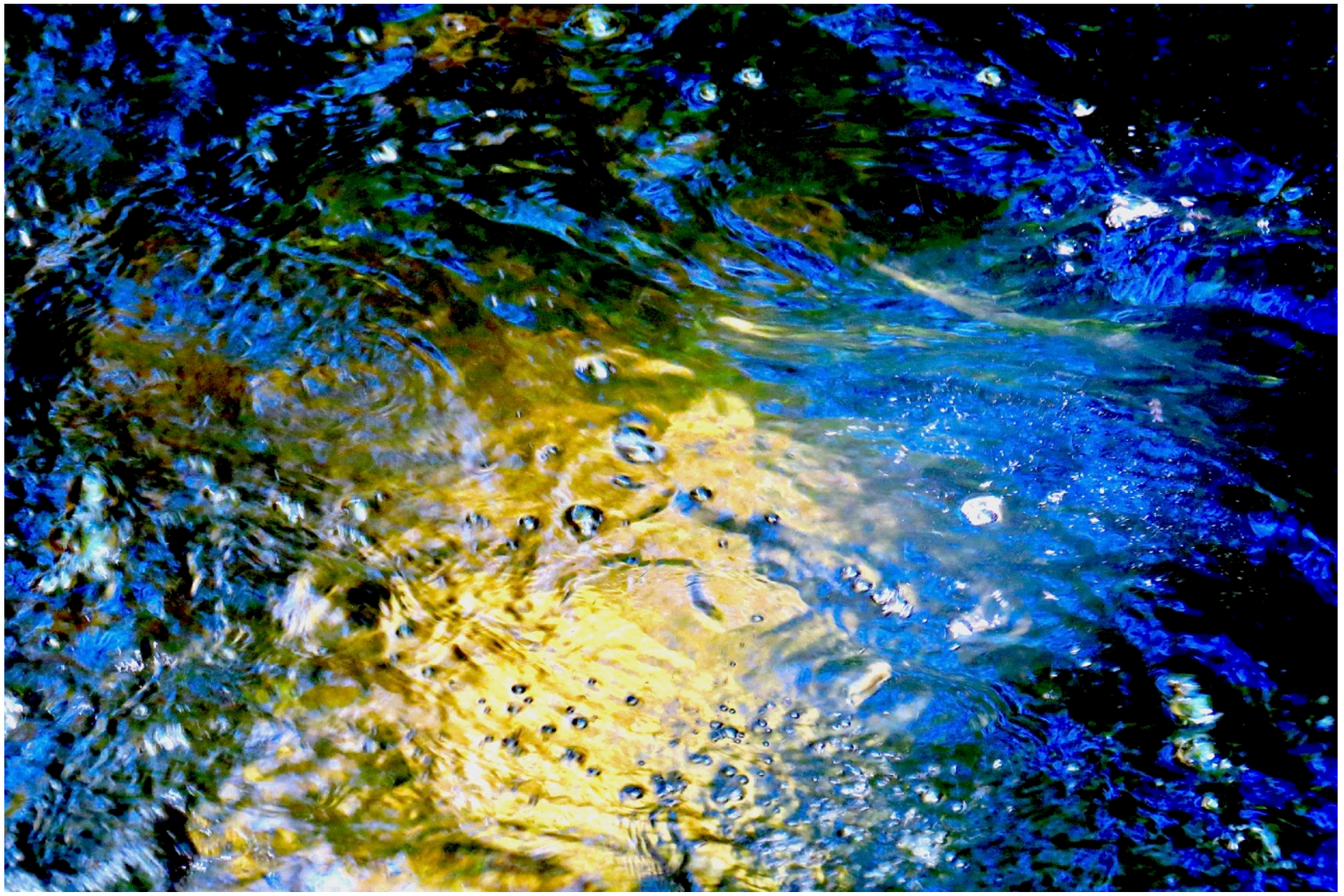
わからないままもいいものだ
想像力の多次元宇宙を
旅行しつづけられるから

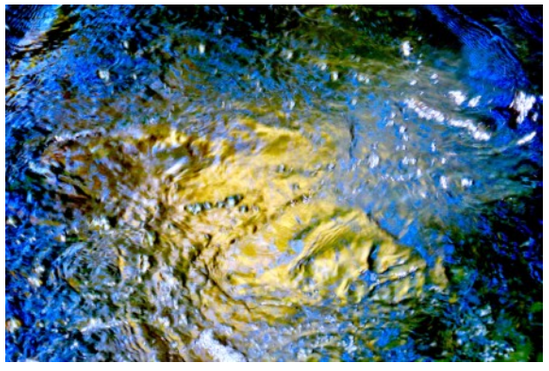
迷っているのはいいものだ
迷っているときには
いろんな道を歩いてゆけるから

まちがうのはいいものだ
正しさだけでは行けない場所を
見せてくれるから

言葉にできないのはいいものだ
言葉になるまえの
沈黙という深海に潜れるから

☆photopos-2124　　2020.7.1





※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

こころをば
なににたとへん

こころは水のなかを
あをき衣なびかせ
星雲のごとく流れゆき

こころは夢のなかを
黄金の光ゆらめかせ
アルカディアを遊歩し

こころは時のなかを
永遠の声ひびかせ
祝祭の歌をうたひ

こころは
何処へと旅をつづけん

（こころをばなににたとへん：
萩原朔太郎『純情小曲集』）

☆photopos-2125　　2020.7.2

※愛媛県松山市・高縄山にて
・おそらくチシオタケ
（傷つくと血のような赤い液がでるという）

傷つけないで

傷ついても
わたしは
わたしのまま

笑わないで

笑われても
わたしは
わたしのまま

いいも
わるいもわたし
わたしは
わたしの場所にいるから
ここから出てはいけない

けれど
傷ついて流れ出す
血汐のなかで
わたしは
わたしの生を生きていく

やがてわたしは
わたしの場所から
出ていかなければならない
そのことはわかっている

そしてそのとき
わたしは
もっと傷つくはずだ

けれど
流された血汐は
わたしを
導いてくれるだろう

笑われても
わたしは
わたしであるという
血の光とともに歩きながら